

「世界最古の会社 金剛組 一四〇〇年間受け継がれてきたもの」

株式会社金剛組 代表取締役社長 金剛組専属宮大工「木内組」棟梁 木内

健一氏 繁男氏

西暦578年、飛鳥時代に創業された「金剛組」。数々の逆境を乗り越え、1400年もの長い歳月をいかにして生き抜いてきたのか。そこには、宮大工がつないだ歴史、代々受け継がれてきた経営哲学がありました。世界最古の長寿企業から明日の専門店があるべき姿を探ります。

金剛組は、西暦578年、四天王寺（現在の大坂市天王寺区）創建という聖徳太子の命を受け、朝鮮半島の百済から招聘された工匠、金剛重光を祖とします。ともに呼び寄せられた他の二人は、それぞれ大和（奈良県）と山城（京都府）の国へ赴き、一説には彼らが世界最古の木造建築といわれる法隆寺の建立に携わったとのことです。「四天王寺に残り、お寺をお護りせよ」と一人命じられたのが初代当主となる重光でした。

当時の大陸の建築技術は日本の数百年先を進んでいたそうです。日本はといえば、豪族が藁葺屋根、庶民が堅穴住居という時代です。突如として各地に現れた巨大な五重塔などの建造物に人々はさぞかし驚いたことでしょう。庶民の間には一気に仏教への信仰が広まつていきました。

日本における社寺建築の変遷—篤い信仰心、豊かな感性に守られてきたもの

8世紀、遣唐使を通じて、日本の社寺建築に本格的な中国様式が取り入れられました。9世紀末に遣唐使が廃止されると、風土や習慣に合わせて日本独自の建築様式「和様」が発展していきます。

13世紀になり、中国から二つの最新様式が輸入され、その一つ「大仏様」は東大寺や東寺など一部の巨大な建造物に採用されました。もう一つの「禅宗様」が全国に広まり、鎌倉後期から室町時代にかけて、和様に禅宗様と大仏様の様式を取り入れたいわばハイブリッド様式の「折衷様」が主流となつていきます。

様々な大工道具の進化とともに、部材同士を同一方向につなげ、部材同士を同一方向につなげ、

聖徳太子の命ではじまり、

四天王寺とともに歩んできた歴史

ぐ「**継手**」や角度をもつてつなぐ「**仕口**」などの技術も生まれ、17世紀初頭には日本の寺院建築の様式が確立しています。

四天王寺をはじめ多くの寺院の創建に関わった聖徳太子は、宮大工や職人たちから信仰の対象とされ、毎年十一月二十二日には、金剛組をはじめとする建設関係者が集まり、番匠堂にて法要が行われます。十二月二十二日、「箸削り」、一月一日の「杖削り」の儀式もお太子さんに工事の安全を祈願するための大切な行事です。

金剛家の当主は代々、四天王寺より「正大工」という役目をいたしています。金剛組がこれほど長く続いたのは、何といっても四天王寺様のおかげであり、お抱え大工として継続的に仕事をいただいてきたことが挙げられます。

四天王寺はこれまで幾度となく台風や落雷、戦争の被害を受け、倒壊・焼失を繰り返してきました。ちなみに現在の五重塔は八代目、七転び八起き塔とも呼ばれています。その都度金剛組が再建を担つてきました。

四天王寺をはじめ多くの寺院の創建に関わった聖徳太子は、宮大工や職人たちから信仰の対象とされ、毎年十一月二十二日には、金剛組をはじめとする建設関係者が集まり、番匠堂にて法要が行われます。十二月二十二日、「箸削り」、一月一日の「杖削り」の儀式もお太子さんに工事の安全を祈願するための大切な行事です。

年が明けた正月十一日の「手斧始め式」は、仕事始めの儀式として代々金剛家が伝承してきた最も重要な行事です。「手斧」とは木工事で最初に使われる、木材を荒削りするための道具で一般には「ちような」と呼ばれ、大阪では「ちよんな」と訛ります。江戸時代の名所案内「摺

「津名所図会」にも紹介されていて、江戸初期には現在の形式になつていたと思われます。

古式に則つた衣装に身を包んだ当主と宮大工たちの行列が、午後四時、金剛家を出発。厳かに金堂へ入ると全ての窓が閉ざされた後、燈明と提灯の明かりの中で儀式が始まります。

「同起立して『総拌』の後、『杖出し』
「杖打ち大事」「杖納め」など、柱を
削り出す一連の工程を模擬的に演じ
ていきます。「墨掛け大事」「糸引き
大事」は、宮大工にとつて最も重要
な「墨付け」（木材に墨の付いた糸を
打ち付けて加工のための印をつける
こと）を模したもののです。



四天王寺の年中行事 「手斧始め式」

た場合は、外の家と養子縁組も行つて います。

現代に受け継がれる「六の教え」
「中庸の精神」を持つことの大切さ

金剛家では代々、必ずしも長男や直系の男子が家を継いできたわけではありません。一度は棟梁（正大工）に任命された大工であっても、能力が足らないとみなされた場合には総意の下で家を出されることもあります。した。棟梁に適任とみなされなかつ

大事」は、宮大工にとつて最も重要な「墨付け」（木材に墨の付いた糸を打ち付けて加工のための印をつけること）を模したものです。

聖徳太子の命を受けて建立された現存する最古の官寺・四天王寺。(写真は明治・

大正時代のもの

血縁を最優先と
するのではなく、
人の上に立つだけ
の実力と器を持ち
合わせた者だけが
棟梁、正大工に選
ばれる。この教え
を守り続けてきた

金剛家には代々口伝えで受け継がれてきた家訓があり、存命中は優秀な宮大工として名を馳せた三二代当主、金剛喜定がこの教えを遺言書として書き残しました。その中の「職家心得之事」には一六の内容が記されています。

遺言書

（中略）

職家心得之事

一、陰陽五行の定様の故実、神社仏閣から俗家まで、儒教、仏教、神明の三教の考を、よく考え、心得なさい。これが職家の第一の得意である。

一、御殿ならびに武家のことは深く考え方なくともよい。その主人の好みに従うこと。

一、読書、そろばんの稽古をせよ。これは職家で一番必要なことなので、余念無く、一心に修行に励みなさい。このほか芸道は、それぞれの器量に合わせ、身分相応のことは学ぶべきだけれども、なにごとも、不相応な場席には立ち寄らないよう心得なさい。

一、世間の方々と交際しても、決して

一、出過ぎることがないよう心得なさい。
一、大酒しないよう心得なさい。
もし心得違いして付き合いと称して大酒などをすれば、思ひがけず問題が起ころ。增長すれば命を失う。よくよく見聞し慎みを持ちなさい。

一、身分以上の華美な服装をしないこと。

一、人を敬い、穏やかな言葉遣いをして、あまりしゃべりすぎないように心得なさい。

一、配下の者、弟子など、目下の人には深く情けをかけ、穏やかな言葉で召し使いなさい。

一、なにごとも、他人と争うな。

一、仮にも人を軽んじて、大言雑言を言わないようにせよ。

一、どの人と接するにも懇懃にせよ。

一、世の中の役目には高下の差別があるが丁寧にせよ。

一、なにごとも諸事万端取引してくれの方々へは無私正直に対応しなさい。

一、家職を勤めるようになつて、見積もり、入札等が発生したときは、その年や時節に見合つた値段を聞き合わせ、莫大な値段や高下の見積りは決してしないこと。正直な見積りを書き付け、差し出しなさい。

一、なにごとも自身に不相分なことは、親類を集めて相談したうえで、万事取り計らいなさい。

一、先祖の靈年、廻忌日、命日には急げることなく香華を供え、仏事・供養の営みをして、時節・身分に応じた布施をするように心得ること。



「なにわの女棟梁」金剛よしあが金剛組を立て直した。(前列中央)

組の原点として大切に受け継がれています。

老舗を立て直した「なにわの女棟梁」

金剛組にはこれまで幾度か存続の危機がありました。最初の試練を迎えたのは今から150年前、明治政府が神道国教化を掲げ、「神仏分離令」を発令したときがきっかけでした。

「廢仏毀釈運動」により、仏教寺院への圧力が高まっていきます。四天王寺も多くの寺領を失い、お抱え大工の金剛組は給料である扶持米がいただけなくなり、外へ仕事をもらひに行かざるを得ませんでした。当時の状況を表す詳しい記録は残っていませんが、苦難の時期であったことは明らかです。

昭和に入つても苦難の道は続きました。昭和七年、不況による仕事の減少に責任を感じた三七代目当主、

金剛治一が自ら命を絶つてしまつたのです。治一の跡を継いだのは妻のよしあです。先祖の教えをしつかり

と守り、社員や宮大工をまとめ上げた金剛家初の女性当主として、後世に語り継がれきました。

昭和九年には、室戸台風で甚大な被害を受けた四天王寺五重塔の再建

を引き受け、自ら陣頭指揮をとり見事に役割を果たしています。戦時下には政府による企業整理令のため廃業の危機に見舞われました。役所にかけあつて軍事用木箱の製造を請け負うことで難を乗り越えていました。

五重塔再建をはじめ、数々の事業を成し遂げた功績から、「なにわの女棟梁」と称賛を集めました。

金剛組の仕事は、檀家さんや氏子さんの寄付淨財によつて成り立っています。人様から預かれたお金で建てていることを忘れず、仕事をいただけけること、神仏に携われることへの感謝の気持ちを持つこと。資材・材料は最後まで無駄なく使うよう弟子たちを厳しく指導しました。必要以上の金儲けに走らず、誠実な仕事に徹していくべきは必ずついてくると、折に触れて説いたそうです。

金剛組が深刻な経営危機に陥っている。噂を聞いた当時の高松孝育会長が「潰したら大阪の恥や!」と行動を起こします。地道に積み上げてきた1400年の実績、その礎となつた人と技術に対する敬意からです。

うか。金剛組を倒産させてはならないと、債権者の皆さんがあつて応援してくれました。幸い暖簾に傷がつくことはなく、民事再生や会社更生法といった法的整理は避けられ、私的整理の形となつたのです。

多くの方々の厚いご支援によつて、平成十八年、金剛組は再建の道へと歩き出しました。自分たちがどこにも負けない仕事とは何か。積み上げ

争入札です。慣れない仕事を請け負つたために多くが不採算受注となり、本業の社寺建築でも、材料費、特に木材費が予算を超え、工期の延長が経営を苦しめました。より良いものをつくりたい、知名度を上げたいという気持ちが先行していたからです。

古いものは一度失つてしまえば元に戻ることはありません。同時に、これまで積み上げてきた人も技術もなくしてしまいます。地元の同業者として見過ごすことはできないと、いち早く支援に乗り出したのが古伊勢建設でした。

高松建設でした。

たために多くが不採算受注となり、本業の社寺建築でも、材料費、特に木材費が予算を超え、工期の延長が経営を苦しめました。より良いものをつくりたい、知名度を上げたいという気持ちが先行していたからです。

原点を見失つたゆえに陥った最大の危機

平成十七年、金剛組は倒産寸前の危機に陥っています。経営の悪化は、不得意な分野への事業拡大、本格的な関東進出が原因でした。

一般建築の仕事はそのほとんどが競

